

西川長夫氏へのインタビュー（2011年，於ソウル）

パリの68年5月革命と日本／韓国への影響¹⁾

聞き手：キム・ウォン（金元），キム・ハン（金杭）／訳：原佑介

尚虚学会では、国民国家批判論で知られる西川長夫立命館大学名誉教授の『パリ五月革命私論——転換点としての68年』（平凡社，2011年）の出版に当たり、パリの68年革命とそれがアジアにもたらした影響をテーマにした座談会を企画した。座談会は、キム・ハン教授（延世大学国学研究院），キム・ウォン教授（韓国学中央研究院）が著書を読んだ感想を中心に西川長夫教授と話をするという形で、2011年10月27日、延世大学サンナム経営館にて、3時間強にわたり行われた。座談会の録音内容を日本語に翻訳して西川長夫教授に送り、修正してもらったものを再度韓国語に翻訳し、それをキム・ハン、キム・ウォン教授が確認と校閲をする、という過程を経て、本号に掲載することになった。言語と国籍を異にする討論者に内容を確認するという簡単ではない過程を勘案するとしても、本座談会の公刊は遅きに失した感がある。ひとえに企画と編集を行なった主催側の怠慢のせいである。遅くなったが、西川教授の著書と今回の座談会が、1991年5月以降急激に変化した韓国の思想史的状況に対する理解に依然として緊要な論点を提供すると判断し、ここに掲載する。病床にありながら座談会の内容を丁寧に校閲してくださった西川先生と、通訳を兼ねてご協力くださったキム・ハン先生、キム・ウォン先生に、感謝を申し上げる。

※参加者：西川長夫（立命館大学名誉教授），キム・ハン（延世大学），キム・ウォン（韓国学中央研究院），チョン・ジョンヒョン（主催側），ホン・ドック（録音・進行）

チョン・ジョンヒョン（主催側）：西川先生，こんにちは。2011年，京都に1年間滞在していた時のある春の日，夕食に招いてくださり，いろいろな楽しい対話の時間を一緒にしたことを懐かしく思い出します。あの時，先生の故郷が北朝鮮の江界であり，先生ご自身が「引揚者」だという話，故郷についての記憶と「引揚げ」の時の経験，その後の先生の研究との関連性などについて，とても興味深いお話を聞かせてくださり，本当にありがたく思っております。今回，国際韓国文学文化学会が開催する延世大学でのご講演で，それについて詳しいお話を聞かせてくださることと思います²⁾。

今日は，先生のご著書とヨーロッパでの68年体験を中心に，いろいろと話を交わしてみたいと思います。今日の座談会で先生とお話をなさるお二人を紹介いたします。延世大学のキム・ハン教授と，韓国学中央研究院のキム・ウォン教授です。キム・ハン教授は，韓国で学部と修

士を終えた後、東京大学で高橋哲哉先生の指導のもと日本現代思想を専攻し、丸山眞男をテーマにして博士論文を書かれました。キム・ウォン教授は、西江大学で政治学を専攻し、1970年代韓国の女性労働者文化に関する研究を進めてこられました。現代韓国の政治史、政治的学生運動史に関する研究も、キム・ウォン先生の重要な関心分野です。今日の通訳をお願いしていた方が、急用で出席できなくなりました。そこで急遽、座談会の討論者であるキム・ハン教授に、通訳を兼ねた司会をお願いしました。キム・ハン先生が、快く通訳の労をとってくださることになりました。それでは、キム・ハン先生、よろしくお祈いします。

キム・ハン：では、早速始めましょう。まず私は、この本が出たことを知りませんでした。西川先生の本は前からいろいろ読んできたのですが、これが最近出たということは全然知りませんでした。

西川：ああ、そうですか。

キム・ハン：学校が忙しくて（笑）。

西川：まあ、出たばかりですから……。

キム・ハン：それで、本の話聞いて、ソウルから注文して、10～15日ほどかかって先週届きました。4日ほどで読み終わった後、本のことを知らなくて損したような感じというか、そういう感想を持ちました。私はこの本を読んで、やはりタイトルにあるこの「私論」ということと、それから私が語った革命以後の68年、5月革命というもの、そしてそれをまた先生ご自身である私から語るという、何というか、非常に困難な試みというか、そういう難しい試みを冒頭の中でなさっているということが、とても面白かったです。前に先生がなさった講演を、私もフロアで聴いたことがあるんですが。

西川：どこですか？

キム・ハン：漢陽大学です。

西川：はい。

キム・ハン：そこで聴いたことがあるんですけども、この本の文章はあまりにも若々しすぎて（笑）、これまでの本ともかなり異なる文体なので、全然違うけど同じ人なのか？ 同じ先生なのか？ という感じでした。それと、軽やかといいましょうか。パッと目につく、そういう感じがしたんですが、私個人としては、自分の問題と重なって、夢中で読みました。というのも、私が1991年に大学に入った後、すぐに5月事件があったんです。韓国では、91年は非常に激しい学生運動と闘争があった年で、私は大学1年生で何も知らずにそこに巻きこまれていき、経

験しました。その後、いろいろその5月の熱気を味わった後、何というか、自らとにかく何かを求めて進み始めたのが、今の作業へと進むようになった状況だといえるような気がします。もう手元にはありませんが、その当時、大学1年の時に読んだある本が、記憶にとっても印象的に残っています。それは、全共闘について韓国で言及した本でした。

西川：ああ。

キム・ハン：その本は、全学連から全共闘に至るまでの様々な写真、絵、エピソードなどのテキストから成る運動などを紹介する本でした。

西川：はい。

キム・ハン：それから、私は修士時代、京都学派の著名な哲学者高坂正顕が書いた『大学問題と学生運動』を、図書館で見つけて読んだことがあるんです。これを読んでもみると、高坂正顕が主導して文部省が発表した『期待される人間像』という政府報告書の延長線上に、この本があるということがわかりました。これが、68年10月に出た高坂の本です。

西川：ちょっと見せてください。

キム・ハン：これは海賊版です。韓国の学生が、こうやって複製したんです。

西川：ああ、海賊版が出たんですね。

キム・ハン：こういう形で、日本の68年は、私自身にとって勉強の一つの入り口でした。

西川：はい。

キム・ハン：それから、本の中で先生も書いていらっしゃる、アルチュセールという名前です。

西川：はい。

キム・ハン：91年といえば、韓国で初めて『マルクスのために』が翻訳された年です。

西川：何年ですか？

キム・ハン：1991年です。

西川：うん。

キム・ハン：はい，アルチュセールです。先生がここに書いていらっしゃるアルチュセールと68年，そのつながりについて，まったく知りませんでした。もともとの出版年は65年ですか？

西川：ええ。

キム・ハン：60年代とアルチュセールのことをまったく知らずにアルチュセールという思想家の本を読む，その中に，それでも何かをこうして見つけ出して，自分の，何というか，糧になりうるんだということが，91年にありました。そういう経験というか，それから，日本の学生運動に関するこういう本を通しての歴史，そしてアルチュセールを皮切りに，韓国では91年から始まった現代思想の輸入というか，それらの読解を通じて，私は何をしたんだろう，とこの本を読んで，そうやって反芻しました。やはり一言で言うなら，私が書いたものもありますが，集団的な使命，それがネイションであれ，階級であれ性別であれ，集団的使命において政治を語るということからの脱出，それをどうすれば避けられるのかということ，やはり自分で考えたのではないかと思います。この本を読んで，そういう感覚が非常にはっきりとよみがえってきたといえますか。まあ，まだ青二才ですが。

西川：うん。

キム・ハン：先生が書かれたことを少し広げて話すなら，「私」から，あるいは「私を」語る，ということじゃないかと思います。

西川：はい。

キム・ハン：語る「私」の位置，それは社会的で歴史的で文化的な位置を多様な視点から見ることでしょう。この本を読んで，自分の勉強というか，自分が大人になって生き方をこのように決定したんですが，その入口となったアルチュセールや全共闘などが重なって思い出され，格別な感じがありました。

西川：うん……

キム・ハン：導入部はすごく面白かったです。まるで自分の頭の中を整理していくかのように感じられ，とても面白く読みました。大体，まあ，まずはこれくらいにして，残りは後で申し上げます。次に，キム・ウォン先生，どうぞ。

キム・ウォン：まず，興味深く，面白く本を読みました。大体四つほどの論点からお話ししようと思います。まず一つ目は，68年前後の時代は，韓国とヨーロッパ，日本の歴史的経験，その時間が異なっていたのではないか，という点です。韓国の場合，68年はやはり，南北の緊張の高まり，その後の朴正熙政権による維新体制の直前段階へと，独裁政権が強化され，権威主

義的な統治が深まった時期でした。その渦中で、国民に対するイデオロギー的強要としての国民教育憲章、たとえるなら日本の教育勅語のようなものが発布された時期です。また一方では、統一革命党事件のような事例がありますが、学生運動や知識人にスパイ嫌疑をかけて政治運動を弾圧する時代でした。ある面で、同じ時代だったにもかかわらず、ヨーロッパと日本と韓国には多くの時代的経験の差異のようなものを感じました。二つ目は、本の第4章です。バルトやアルチュセールを論じた部分で、キム・ハン教授もおっしゃいましたけれども、ここではやはり、マルクス主義の危機を語る状況と、それに伴う知識人のあり方に対するある種の嫌疑と疑問が浮かびました。それがあつた種の理論的・実践的次元において非常に重要な問題になっていた時期だったということでしょう。韓国では、このような形の問題は、20年ほど経った90年代初めになって浮上してきます。三つ目としては、先生はパリで経験なさったわけですが、当時日本に戻られた後、国内で68年革命の新左派に連なる流れはどのように議論されたのかも気になります。

最後に、最終章の第5章でおっしゃった、フランス革命をどのように記憶するのか、それは68年をどのように忘却するのかと結びついている、という指摘です。そこにはある種の記憶の闘争などが隠れているんですが、いま韓国でも、90年代後半、2000年代に入って、80年代と90年代の学生運動や政治運動をどのように記憶するのか、あるいはどのように忘却するのか、という記憶の闘争の問題があり、それと重なり合っていると感じました。大体四つの論点です。先生の本を読んだ感想です。こういう問題についてどうお考えか、語り合えたらと思います。

キム・ハン：個別の論点にしたがって討論をするよりも、先生が私たちの感想に対して、自由に、気楽に話していただくのはどうでしょうか。

西川：はい。まず、正確に読んでくださって本当にありがとうございます。実際この本を書く時もそのことは念頭に置いていましたが、おそらく韓国はかなり異なる状況だったので、この本は韓国では読まれず、理解されないかもしれない、と心配していました。ところがこれまでの数年間、私の本に対して、韓国の方々からの反響が、日本よりも直接的で敏感に来ることがありました。その理由が何なのか、考えていました。68年5月についての本を出した時、日本と韓国、そしてもちろん韓国とヨーロッパ、フランスの歴史的な時間が異なるとおっしゃいましたが、その問題が挙がるだろうと予想していました。それだけに、今日は何んな話が聞けるか、私としてはすごく期待していたんです。

それから、最初の話である「私」の問題について、とても面白い観点を示してくださったと思います。「私」から語るのではなく、私に対応する多様な視線をとらえる。そのことをかなり意識するといいますか。これは、全体としてみれば一種の歴史であつて、私はこれを一つの作品だと考えています。だから、敢えて分類するなら、それは歴史記述です。私が考える歴史記述といいますか。逆に言えば、今までの歴史記述に対する強い批判として、私は書いているんです。それから、古い記録や資料を読んで行く実証主義的な歴史記述というものに対しては、これまでも多様な言語論の見解がありましたが、書かれたものに実証主義的な客観性などないと思います。資料それ自体も作られたものだ、ということです。そういう虚構性のようなもの

もあるはずですよ。じゃあどういう観点から歴史が語られるのか、という問題を、私なりのやり方で提出したんです。だから、この「私」というものは、一つの提案です。二つ目には、多様な記述のスタイルを盛りこむことができるでしょう。それと、私自身がずっと前に書いたもの、これは時間が経過するにつれてかなり客観化された資料になります。私自身にとっても、ということです。また、その時書かれたジャーナリストたちのいろんな文章、あるいはもちろんビラや新聞記事などを持ってくる、ということもあります。それから、写真を入れるんです。日本語が読めなくても、写真だけでも見ればいいじゃないか、ということです。これは、現場で私自身が撮った写真です。それを40年以上経った後で復元することができました。1年半ほど前に名古屋大学でシンポジウムがあったんですが、とても面白かったです。そこで私がそういう古い写真を持っているということを知って、写真の専門家をはじめとする人たちがそれを全部現像して再処理してくれました。もうフィルムが使えなくなったと思っていたら、そうやって再現することができたんです。すると、それを見て、私がすでに事件のことをどんなに忘れてしまっていたかがよくわかるんです。それを通していろんな新しい発見、私自身によってのみならず、それを見た読者がどう判断してそこに何を読みとることができるかということは、また変わってくるでしょうが。また、最後の方法というのは、多様な知識人の反応とか、非常に複雑で多様なことを重ね合わせることです。かなり意識的な歴史記述の一つのあり方ですが、これは歴史記述一般というよりは、私にとって歴史記述はこういう形以外では存在しえない、ということです。つまり、そのような本来の歴史記述というのは、もともと存在している標本的な歴史記述ではない。だから「私」の問題として書いていくのであって。

チョン・ジョンヒョン（主催側）：先生、通訳のために、少しずつ分けてお話しいただけますか。

西川：ああ、すみません。

キム・ハン：どうぞ、先生。

西川：そうですね。では、一つ質問を……あの、キム先生がおっしゃった90年代ですか。集団的使命感から抜け出すということは、一言で言えば民族ということですか。

キム・ハン：民族もそうですし、階級もそうです。いわゆるグランド・ナラティブ批判です。どうすれば身体的感覚においてグランド・ナラティブから抜け出すことができるか、ということ。本で読んだ知識の次元ではなくてですね、これは90年代以降のポスト学生運動世代の一つの問いではなかったかと思います。それが私自身の始まりだったのではないかと考えています。

西川：ああ、なるほど。それは、仮に日本の68年と比べるとすると、日本の68年はそれくらい集団的使命感から抜け出すことができていなかった、といえるのではないのでしょうか。だからより新しい最近の状況の中で、キム先生が考えているようなことが生まれているのではないかと思うのですが、どうでしょうか。

キム・ハン：そうです。実感としていえば、先ほど申し上げたように、全共闘にしる、68年の経験というものに90年代初めに日本語や英語など多様な文献で接したのですが、それまでの80年代韓国における運動も、民族や階級というグランド・ナラティブに埋もれていて、そこでは先生がこの本でしばしば強調された自分というものが抜け落ちているということなんです。そしてまた一方で、90年代以降になると、学生運動が退潮期にさしかかる過程で様々に議論された現代思想とどうやって混じり合い、この状況の中である種の批判的意識を維持していくのか、ということが問題になります。それは結局、深く掘り下げてみれば、自分がこの世界でどう生きるのか、という問題です。その中で全共闘や68年の経験が私に示してくれたのは、やはり強烈な言語です。日本であのようなムーブメントがあったということ、またフランスの68年、あるいはコロンビア大学で起こった運動といった一連のことが伝えてくれた印象というか、解放感のようなものが、とにかくあの時期には非常に重要だったといえます。それから、私が次に提起したい問題は、重要なのはグランド・ナラティブ、あるいは集团的使命感から抜け出した自分というものもまた個人ではない、ということです。グランド・ナラティブや集团的使命感から抜け出した自分は、異なる共同性を帯びざるをえません。つまり、集団と個人という枠組みそのものからどうすれば抜け出すことができるか、集団から抜け出して自分個人へと入っていく、そういう観点ではなく、人間たちの集まりを集団と個人というふうにとらえる観点からいかに抜け出し、自分という新たな共同性をいかに可能にするか、ということ、当時考えていたのではなかったか。今もそうですが、私としてはそうです。

西川：そうですか。そのように考えるようになった、そのように感じるようになった先生ご自身の一番根本にあるものというか、あるいは個人的な体験というか、それは何ですか。

キム・ハン：私の話ばかりして、申し訳ありません。断片的なエピソードですが、私が通っていた大学の学生新聞に、学生会館で女子学生が煙草を吸っていて横っ面をはたかれたという記事が載ったことがあります。英語がプリントされたTシャツを着て来たら先輩が怒る時代だったんです。これはかなり極端な例ですが、学内の左翼運動の抑圧的な雰囲気非常に強い不満を感じたんですね。そこには、もちろん学生運動のあり方そのものに対する問題提起もありましたし。だからといって、学生運動自体が社会全体の中で間違っただけをしているのかといえばそうでもなく、何というか、そういうすごく逆説的な、相矛盾した感情の中に置かれていたんです。もう一つ重要なのは、88年オリンピック以降の文化産業と消費資本主義の爆発的な発展の中で育った世代が、私たちです。そこから来るある種のオリエンテーションの差異というか。成長のオリエンテーションの差。いろんな複合的な問題があると思います。もちろんそこには、先ほど申し上げた、アルチュセールやフーコーだとか、デリダやラカンといった現代思想の影響もありましたし。その中で、ナショナルなものの過度の強調や、階級的なものに関するある種のドグマが問題視されていたんです。とにかく、そういう雰囲気に対するある種の抵抗感というか、そのころの雰囲気が、そのような私の発想を呼び起こした原因じゃないかと思っています。さっきキム・ウォン先生がおっしゃった、68年の歴史的時間の差異。90年代初めでありながら89年とつながっている、91年という、そういう時間的差異が奇妙に錯綜したり交差したりして

いる感じです。

西川：その通りです。それは……単に68年が何年に来るのかという問題ではありません。

キム・ハン：ええ。

西川：あれこれ錯綜しながら、歴史的時間が創られたり流れたりするということですよ。興味深いのは、最近日本で、68年を知らない世代が膨大な資料を読んで歴史を再構築していることです。ところが、そうやって書いている本人、つまり「私」の問題は、さほど意識されているようには思えません。それだけでなく、68年世代に属する人たち自身も書き続けているんですが、前にあったシンポジウムでもそうだったけれども、68年は失敗し駄目になった革命で終わってしまった、という意識が一般的です。締めくくりを誤ったと語ってしまうことで、68年が今も続いているというか、現代の問題として考えられる部分は、あまりにも少なくなってしまうました。なので、それに対する反論の意味でも本を書きました。

キム・ハン：それは、先ほどキム・ウォン先生がおっしゃった、忘却と記憶の問題ともつながっているでしょうね。

西川：はい。とにかく、今申し上げたことは重要な問題なので、もう少し詳しくお話ししたいと思います。名古屋大学のシンポジウムでのことです。68年当時全共闘で活躍していた人が、要するに全共闘は締めくくりを誤ったと言うんです。作戦あるいは戦略が誤りだったとすることによって、全共闘の人々が自ら68年を矮小化しているんです。ここには、記憶の問題があります。それは彼らだけの問題ではないんですが、自ら失敗だったと、締めくくりを誤ったと考えてしまう立場は、一つの巨大な時代的な流れに関係しているからです。つまり、それ以降の日本社会で、そのような記憶を、68年の記憶をどのように消していくかという、ある種の記憶を抑圧するイデオロギーやシステムが強化されていったということです。それが今度の3・11で流れが変わったというか、若者たちの思考が変わる契機はあったように思われます。『朝日新聞』の記者がやってきて、この本についてインタビューをしたんです。大手新聞社がこの本に関心を持つだろうとは予想もしなかったので、すごく驚きました。日本の新聞は意識的・無意識的にじわじわと68年の記憶を圧殺するようなものを創り出しているからです。それは必ずしも68年についてだけではないのであって、たとえば、「反社会的」という言葉が非常に否定的な意味を持つようになった、というのがあります。戦後直後は、「反社会的」というのは褒め言葉、良い言葉でした。つまり、現代社会は悪いものなんだから、革命なり何なりやって、社会を変えていくんだというのが正しいことだったんです。ところが今は、「反社会的」という言葉が非常に悪い言葉になってしまって、たとえば相撲の八百長のようなものを「反社会的」行為だとか、ヤクザは「反社会的」だとかいうような使われ方が一般的です。つまり、「合法主義」の問題です。アルチュセールは、法律というものは抑圧的であるほかないと言いましたよね。国家が創り出し、国家を維持するためのシステムを決定するものですから。非常に微妙な話になってしまいます

が、日本の進歩的的人士たちが今「憲法を守ろう」、「憲法九条を守ろう」という運動をやっています。私も憲法九条を守りたいですけども、その運動には基本的に不思議なところがあります。つまり、合法主義なんです。憲法というのは、国家の制度を守ろうとするものです。既成の秩序を守ろうとするものですよ。ところが、それがまるで進歩的な運動であるかのようになっています。そんなふうに「反社会的」というものを抑圧し、合法主義を強めています。今の若者たちは暴力に対して非常に敏感ですが、それが平和憲法の結果だと言ったらちょっと皮肉っぽくなりますけれども、要するに、中国で反日デモが起こって日本の会社や店に卵を投げつけたと、中国のデモ隊について、それをとんでもない暴力だと考えてしまうんです。大学で授業をして、あれこれアンケート調査をすることがあります。韓国の留学生と中国の留学生が20人ほど入ってきて、全部で400人くらいになる授業で調査をしたことがあるんですが、日本の学生たちがかなり平和主義的になっていることがわかりました。とにかく、そうやって記憶はだんだん圧殺されているし、運動の当事者自体も、やり方を間違えたとか締めくくりを誤ったとか、そういう戦略的な点を問題にして、そこで止まってしまう、そういう状態です。記憶の闘争というものは常にありますが、日本社会ではそういう記憶も圧殺する、ぱっと見にはとても平和的で道徳的で合法的だけれども、そのこと自体が抑圧や圧殺の働きをしていると思います。

キム・ウォン：暴力、あるいはある種の忘却のメカニズムの問題について話をしてくださいましたが、韓国で91年5月に、68年5月と同じようにほぼ一ヶ月続いた反政府デモのことを思い出しました。その時学生が警察に撲殺されるようなこともあったんですが、91年5月と68年とは異なっていることの一つに、死ということがあります。91年5月当時、10人以上の人たちが焼身自殺をして、死によって闘争を継いでいこうという流れが存在したんですが、このことがその後91年5月を記憶する中で問題になりました。つまり、死によって闘争が始まったのに、まさにその死のゆえに、闘争が一步さらに踏み出す上でむしろ躓きの石になるという部分があったし、また当時、デモの中で残酷な死を直接目撃した人たちがたくさんいたため、運動に参加した当事者たちもかえって事件そのものを自ら忘れようとしたり、あるいは現在化して自分のアイデンティティを構成するところから削除してしまったりするメカニズムも、同時に存在していたように思います。さらに、先ほど「反社会的なもの」の意味変化について、それから国家制度を守ろうとする流れについてお話されましたが、韓国の場合、91年5月という局面と社会主義圏の没落という局面が重なり合っていて、それは一方では理念の危機、もう一方では運動の危機という形で現れました。理念の危機は、この本でも紹介されているアルチュセールら西欧のマルクス主義によって突破しようとする流れがあった反面、運動については、むしろこれと軌を異にしていたと思います。昨日のソウル市長選で、長く市民運動に携わってきた人が当選したことが象徴的に示しているように、過去の80年代の社会運動や左派的運動がいわゆる市民運動や合法的運動へと転換し、運動の主体も対象も目的も変わる、いわゆる80年代パラダイムが転換する現象も、韓国でも似たような形で現れたように思います。

西川：なるほど。反社会的なものの意味変化も合法化の傾向も、似ていますね。日本の憲法の問題で私がもう一つ納得できないのは、九条を守ろうとする運動が、天皇制の問題に、それが

憲法の冒頭にあるにもかかわらず、触れようとしないことです。天皇制の問題に触れることは新聞も報道しないし、その根本的な問題に触れたら運動も成立しないという現実があるのに、そのような運動の虚偽性を当事者たちが認識しているかというところでもないようで、どうにかこうにかごまかしながら九条に反対している、というのがおおよその状況です。

キム・ハン：ちょっと話題を変えて、先生が今回書かれた本の方法の問題を、少し考えてみたいと思います。先ほど先生が話された歴史記述ということと関連する問題なんですが、先生の本は実証主義、あるいは近代歴史学そのものに対する強い批判でもとおっしゃいましたが、私も方法に対する意識をかなり強く表した本だという印象を持ちました。それは、先ほどおっしゃいましたが、全共闘が締めくくりを誤ったと語ったことに象徴されるように、戦略・戦術の問題として68年を扱うことを拒否するということだと思っています。なぜなら、戦略・戦術を考えることは状況の文法であって、国家の物語、掘り下げてみればシステム側の歴史叙述法だからです。そこで、この本の方法の問題が見えるようになりました。私は、その方法的な原則に対して深く共感しながら、自分もこういうものを書けるだろうか、こういう問題として書けるだろうかということにも関心を持って読んでいったんですが、やはりここには非常に複雑な問題があると思います。それは、先生がこの本で書いておられる「パロディとしての革命」という言葉に関わることです。「パロディとしての革命」である限り、それは繰り返されるほかないと思います。ほかならぬ「パロディとしての革命」というものとして、身体と脳裏に刻まれた記憶として、先生はそれを再演しようとしておられるんじゃないでしょうか。それはパヴェ [pavé, 敷石]、韓国語に訳すとチャントル [짚돌] ということになるでしょうが…… (笑)

私たちの世代でも、学校の舗道を壊して投げたりしました。もちろんパヴェの、パリの舗道ではないですが、アスファルトを砕いてデモをやった記憶があって、この写真はとても懐かしいというか (笑)、経験もしていないのに懐かしいというか (笑)。そういうふうには、私が体験していないことを記憶させる、喚起する力が、先生の歴史記述の中にはあるように思います。じゃあこのような歴史記述とは何なのか、ということ。私もそれについて文章を書いたことがあるんですが、ラテン語で、テストイス (testis) とスペルステス (superstes) という、証人を表わす二つの単語があります。テストイスというのは、法廷での証人ですね。第三者としての事実を確定させる証人です。もう一つのスペルステスというのは、生き延びた証人です。こちらの証人は、単に法律の判断を確定させるために証言するものではありません。ところで、近代の歴史学を根本からとらえているのは、法廷モデルの証人だと思っています。ある事実を確定させるものですね。ある事実を一つの判断基準で確定させてしまうものです。そこからは、その状況を生き延びた人たちの多様な証言は漏れ落ちてしまいます。先生が書いておられる方法というのは、やはり後者なんじゃないか、そして結局のところ、後者の証言というのは、あらゆる規範や法律、規則、価値判断の向こう側へと、読者や聴く者を連れて行くことができるものなのだと思います。それはある面で、大学の言語、ロゴスというものに抵抗する実践ではないでしょうか。その意味で、先生は5月を、5月の言語、5月式に言い換えることができるか、再演することができるかということを実行しておられるんじゃないかと思っています。この本には、貴重な写真や経験の話もあるし、巨大な事件の流れもありますが、そこを貫いているこの方法意識に、

私は感動しながら読みました。逆説的だと思いますが、このような書き方、つまりある種の言語に対抗する言語をお使いになる中で、どういうふうにご自身の内部でこの方法を意識されているのか、ということは伺ってみたいです。そういう観点から本を構成するのは、文章一つ一つ、とても苦勞なさっただろうと思います。文章をお書きになる中で方法をどのように意識なさったのか、パソコンで書かれたのかペンで書かれたのかわかりませんが、どんなためらいや逡巡などがあったのか、あるいは滞りなく書かれたのか、といったことをお聞きしたいです。

西川：まず、私はワープロを使いません。だから、400字詰め原稿用紙に一字一字書いています。書いて、半分くらいは破り捨てて書き直し、あれこれ吹き出しを書きこみ、メモを書き留めておいたり直したりしながら書いていますが、ワープロを使ったら相当違うものになるだろうと思います。やはり、手で書く行為には、言語に抵抗して書き直すという、ある種の抵抗があります。また、言語では書くことができないこともたくさんありますよね。大切なのは、自分の感性や身体を通して出てくるものをどうやって表現するのかということ、そしてその表現を通して自ら納得したり喜びを感じたりすることじゃないでしょうか。たとえば、私が翻訳した本の中に、ミシュレのフランス革命史があります。彼は特別な歴史家で、何というか、資料を実現するために書く歴史とは違うものを書いています。また、運動というものは、しばしば言語が大きな部分を占めてはいますが、やはり言語で表現できないものがあるからするものです。それをどうやって記述で表現するかが苦勞のしどころであり、そうやって苦勞しながらあれこれ試みています。

キム・ハン：そのように読むと、内容も内容ですが、文体の問題に相当気を使われています。何というか、禁欲的な記述があるんじゃないか、という感じを受けました。特に、第4章のルフェーブルやアルチュセールを取り上げた部分では、かなり相反する感想を同時に持ちました。一つは、その前に取り上げられた森有正や加藤周一についても同じなんですけど、もう少し突っこんだ批判があるべきではないか、ということです。もちろん、そうしてしまうと、ちょっと前に申し上げた、近代歴史学の一つの思想史記述のようなものになってしまうという問題があるかもしれません。ともかく、客観性とまではいきませんが、彼らに関する感想を非常に印象的に書くということが一つあり、もう一つは、両者の間に非常に禁欲的な文体があって、読んでみると、想像力は刺激するけれども相当戸惑う感覚もあります。

西川：おっしゃるとおりだと思います。日本でいわゆる知識人がどうやって形成されるのかというと、大学に入って外国語を習い、外国のあれこれの知識と思想を習い、その用語を使ってあれこれ話します。私はそのことを批判して「マティネ・ポエティック」論を書きました。これは、日本だけでなく韓国もたぶん同じだろうと思いますが、日本の知識人が外国を学ぶことで知識人になり、外国の理論に頼ってあれこれ記述します。私自身の中にもそういう部分があって、だからそこからどう抜け出すか、それが5月の問題なんです。それから、やはり相当禁欲的に書いていますね。たとえば、アンリ・ルフェーブルについては、ちょっと申し訳ない表現を使いましたが、実際私自身はルフェーブルから絶えず多くの影響を受けています。アンリ・ルフェー

ブルの『パリ・コミューン』がちょうど67年に日本で翻訳され、今度岩波文庫からまた出ました。40何年も前の翻訳でもあり、最初の翻訳者である河野健二さんもお亡くなりになって、多くの部分を修正して翻訳し直し、解説でルフェーブルについて書きもしました。最近ルフェーブルが再評価されていますし、彼の空間論が非常に大きな流れになっています。かなり前に出版された『空間の生産』の新たな英訳が出て、一種のブームにもなっていますが、一体ルフェーブルの何を読んで書いているかは疑問です。もちろんルフェーブルは初めから日常生活批判の形で日常性について書いていたし、それを大きく整理して『空間の生産』を生み出しましたが、彼の最初の出発点というか、転機は『パリ・コミューン』でした。パリ・コミューンは都市の叛乱であったという点で、パリ・コミューンから再び都市の問題、空間の問題を書いたのが、現在の空間論なんです。ルフェーブルを参照して優れた空間論を書く方々も『パリ・コミューン』を読まない場合があったりして、この本ではルフェーブルについて少し高く評価しましたが……

キム・ハン：4章に登場する固有名詞に相当愛情をお持ちで批判を禁欲的になさっているようですが、愛情の表現もとても禁欲的になさっていると感じました。特に加藤周一や森有正については、仲がお悪いのかと思ったのですが……（笑）

西川：いえ、全然そんなことはありません。

キム・ハン：だから、森有正に対する先生の尊敬の念のようなものも、非常に注意深い形になっているように思われます。

西川：そうですね。

キム・ハン：ここで少し前の問題に戻ると、先生の方法の問題、つまり68年を「私」から語るという困難さがあって、完全に入りこむことができない部分があったのではないかと、思います。

西川：はい、そのとおりだと思います。

キム・ハン：だから、完全に出ていくこともできなかったのではないかと、思います。

西川：その部分、本当にうまくお読みになっていると思います。

キム・ハン：私はこの本で、インテリア・コロニー（interior colony）、「国内植民地」、たぶん韓国語では「内部植民地」と呼ぶ概念を、すごく久しぶりに見ました。

西川：そうですね。いつだったか、漢陽大学で話したこともありますが、日本では、植民地というと、まず「内部植民地」を指すことが多いです。たとえば、北海道を開発する際に「植民地」

という言葉を創りました。周辺部を植民地化することを含んでいた日本語の歴史があります。

キム・ハン：「内部植民地」という言葉それ自体が重要なものではありません。社会の葛藤や不平等の問題を、階級的に見るなりジェンダー的に見るなり、多様な見方があると思いますけれども、敢えて植民地という視点をとる場合、階級その他多様な指標によって葛藤や軋轢を見た場合よりもうまく捉えることができるようになるものは何か、ということです。なぜ階級ではなく、ジェンダーではなく、なぜ人種ではなく、植民地なのか、ということです。それは先生が今おっしゃったルフェーブルの空間論とつながっているんでしょうが、「国内植民地」の場合は、やはり空間あるいは地政学という問題が出てきます。それは、階級によっても人種によってもジェンダーによっても見えない問題だと思います。その点については、特に5章、中でも2006年の3回目の暴動とつながって書いておられ、とてもよく伝わっていると思います。先生も先ほどおっしゃいましたが、日本と韓国の歴史問題を考える時、その空間的な配置、政治的な力学の問題が重要な問題になると思うんですが、その残された構造が依然としてどのように維持されているのかということを考えれば、非常に重要な論点になります。私がお聞きしたいのは、このような「国内植民地」、「内部植民地」、インテリア・コロニーという概念または範疇を念頭に置いて朝鮮半島と列島を考えると、どのようなイメージが描かれうるか、ということです。

西川：明日話す内容を少し先に話しておく、ひとえに私自身の体験と出生に関わっています。私は北朝鮮で生まれました。北朝鮮で11歳まで育ち、敗戦後引揚げて日本に帰ったんですが、私の問題を深く考える時、自分の感受性や感覚やある種の思考パターンのようなものは一体どうやって作られたんだろう、という思いになります。ある種の原風景というか、原体験というもの、朝鮮と満洲で小学校5年まで育つ間にほとんど作られ、それ以降あれこれ考える時、たびたびその記憶が浮かんできます。私自身、かなり視覚的なイメージの人間なのかもしれませんが、その記憶が常について回ります。でも、記憶の忘却作用もあるし、間違っただけで記憶することもありますよね。原風景というのは、決して一つのものではなく、非常にたくさんあるものだし、不断に変わっていくものだと思います。要するに、だんだん年を取るにつれて、その原風景を振り返り、現在の自分との関係を考えるんです。私にとって、原風景の根本には植民地があります。私は植民地で、韓国で育ったし、しかも父親は軍人でした。だから、ほぼ隔離された形で、米軍基地と似たような基地の中で育ったんですが、それでも基地の外の人たちと友達になったりすることがありました。とにかく、私自身の一番懐かしい思い出の場所が、実は植民地なんです。しかも、軍人の家族だから韓国のあちこちをひっきりなしに回り、それから日本に引き揚げたんですね。その前に北朝鮮の鎮南浦というところで1年近く、10ヶ月ほど抑留されていたんですが、耐えきれなくなって脱出し、38度線を越えました。1週間か10日ほどさまよって、どうにか逃げることができました。ところが、日本に帰ってみると、日本はアメリカの植民地になっていたんです。私は1年近く抑留されている間、純粋な愛国少年でした。それが、米軍のジープの後を追いかけて「ギブミーチョコレート！」と叫んで走る子供たちの中に入っていったんです。そこで初めて「これは植民地だ」という考えに至り、そうして、自分が育った場所が植民地だったということ、逆転させて理解したんです。それが私の生涯

最初の転換点で、その時から自分の個人史の中でも抜かすことのできない部分としてその時の体験を呼び覚ましなが、それを普遍的な理論として創り上げ記述するという作業をずっと続けてきたし、この本もその延長線上にあるんだと思います。その最初の転機、転換点は、私にとってはとてつもないことでした。天皇を崇拜していた愛国少年に、その天皇崇拜の心は引揚げてから3、4年は残っていたと思うんですが、ある日中学校の先生が、自治会活動や弁論のようなことをしている時、私の話を聞いて、「どうして天皇がそんなに大事なの？」と訊いてきたんです。すると、本当に一瞬のことでした。世界が崩壊したというか、何の理由もなく、何の根拠もなく、天皇を崇拜するとか天皇のために死ぬとかいうことの根拠のなさを、一瞬のうちに悟ったんです。その時まであれこれ考えて悩んでもきましたが、その瞬間に自分の世界が崩壊してしまいました。それは、軍国主義から民主主義への転換ではなく、文字どおり世界が崩壊するという感じでした。世界というのはいつでも崩壊していくもので、そういう感覚は68年にもあったでしょうが、とにかく私は天皇を否定するようになり、戦後民主主義教育をかなり熱心に受け、民主主義教育の優等生になったんです。大江健三郎のようにですね。68年は、戦後の価値の基本的な事柄がすべて崩壊する事件でした。ところが大江健三郎は、45年は経験したけれども、68年は経験しませんでしたね。つまり、それは彼にとって転換点でもなく、世界崩壊の事件でもなかっただろうということです。それに対して私は、68年の真ただ中で、植民地というものを意識しました。そうして、日本のインテリたちが植民地に関して行う様々な運動が、ニセモノっぽく思えるようになりました。どういうことかというんですね、日韓併合についてこれまで何が問題になったのかというと、謝罪だったんです。そして、あの条約が合法的だったか否かということ、そうすると賠償問題に帰着しますよね。でも、植民地の問題というのは、そういうことじゃないと思います。本当に植民地を自分の問題として考え、また本当に自分に対して責任を負うのなら、それは、植民地を生み出すものとは何か、そしてそのような世界の構造とは、日本の構造とは何かということを徹底的に思考し、解明すること、私の考えでは、それこそが知識人の責任の負い方です。こうやって私自身、植民地というものを歴史的に思考し、植民地主義を生み出すものは何なのかということについて様々に思い悩んできたわけですが、究極において、その原因の一つは国民国家である、という結論に達しました。国民国家とは、基本的に別の国家との強弱関係、侵略関係によって成立するものですよね。だから、国境問題のない国家間関係はありえない。そして、国民統合を成すイデオロギーは、ことごとく愛国的で、他国との戦争を起こして勝利し、他国を支配することを美徳とするものです。そして、今のグローバル化した資本主義を見てもはっきりとわかることですが、それはそのような国家を支える資本の搾取を正当化するものなんです。そうやって国家のイデオロギーあるいは国家のシステムと資本主義が合体して、数百年が経ちました。それから、植民地主義を生み出すもう一つの原因は、この本の最後にも書きましたが、文明の概念です。文明の概念とは、科学でもあり学問でもあり芸術でもありますが、基本的には開発のイデオロギーであって、この三つが一体になる時に植民地主義が不可避的に生じます。つまり植民地主義とは、近代の中で形を備えて現れる普遍的な条件を持っており、それがあれこれの歴史的な条件の中で特定の形をとるようになるんです。したがって、国民国家が生まれる時、国内植民地はもちろんのこと、外国を支配し植民地化するということが発生します。その結果、世界の約四分の三が植民地化されたんです。

その後もやはり国家と資本と文明イデオロギーを備えたものがどういうふうに変換していくのか、そして、今日のようにそれがグローバル化していく中で植民地はどういう形をとるのか、と問うこともできるでしょう。今日では、植民地なき植民地化が生まれているといえるかもしれませんが、そこで新たに内的植民地、内部植民地、国内植民地が登場しています。それが世界のあちこちではっきりと現れているにもかかわらず沈黙していることが問題だと思います。

あの68年は、久しぶりに植民地主義の問題、あるいは第三世界主義ともいわれていますが、ベトナム、アルジェリアなどフランスが持っていた植民地の問題から文明の概念に至るまで、それを生み出した西洋側からの自己批判として、かなり変形したやり方で中国の文化革命をフランス風に翻訳したものだったと思います。

キム・ハン：韓国の根っこになる植民地の問題について、もう少し考えてみたいと思います。どうも私たちの世代にとっては、植民地経験というものがある種の歴史的な問題になったり、あるいは研究をする立場からいえば一つの研究対象としての植民地になったりしますが、今の先生のお話を聞いて、またこの本を読んで、やはり植民地の問題を考えるということは空間の問題を強く意識するものなのだと思います。どういうことかということ、単に三次元のユークリッド的な空間、私たちがその中にある空間ではなく、先生も少し前に世界ということの話されましたが、ハイデガー的な意味における世界経験というもの、空間の問題の核心だと思います。その意味で、植民地を問題化することは、自分がどのように知覚し表現する世界を創り出すのかということと非常に密接に関連していると思います。そろそろ時間だということなので、この本を読んだ総合的な感想を申し上げますが……仮にこのように空間の問題とは世界経験の問題なのだとすると、この本での先生の方法が何か新たなものを明らかにしてくれたように思います。竹内好が1960年の安保闘争の時、戦争体験の追体験ということ、つまり60年安保の経験を通して戦争体験を重ねて追体験することができるのではないか、と言ったことがあります。ここに、竹内好の鋭い方法意識が表れていると思います。それは何かということ、単に先輩や前の世代が戦争経験を下の世代に伝えるんじゃなくて、下の世代がどういう形で戦争体験を、つまり経験したことのないことをどうやって体験するのか、というきわめて困難な戦争の記憶の伝達法を語っているんです。彼の方法はきわめて鋭い問題意識を含んでいますが、私には、それが果たしてどう可能なのか、という疑問がありました。いや、可能なのかというより、私にとってそれは、何か謎の塊のようでした。それが、今回この本を読んで、また今日先生のお話を聞いて、やはり追体験というか、重ねて追体験する、自分が経験したことのないことを記憶し体験するというきわめてアイロニカルな体験をするためには、やはり植民地というものが絶対に関わってこなければならないのだということを感じました。それはやはり自分がどう世界を知覚し構築していくのかという問題とも関わっていると思います。その意味で、先生はこの本の最後の部分に、非常に印象的な文章を残しておられます。453ページです。要するに、68年に、それまで存在しなかった共産主義が出現したとおっしゃっているんですが、その中に、「それはユートピアにすぎないという反論が直ちに寄せられるだろう。だが既成事実の秩序のなかで既成の概念を使って冷静に組み立てられた未来社会像と、六八年五月のような祝祭的革命的なかたに現出した未来社会のどちらを信じるか」とあります。もちろん後者を選んで

おられるんですが、私にはこの「信じる」という動詞がすごく印象的でした。どういうことかという、それが正しいとか理屈に合っているとかいうことじゃなくて、信じるんだということですよ。それはやはり、自分が世界を構築するんだということとつながっています。そこで、最初に申し上げたように、先生がここでも続けて唱えておられる「私」というものが重要になってきます。この「信じる」という動詞をどうやって共有するのかということが、ブランショの「明かしえぬ共同体」ともつながる問題だと思います。ところで、やはり私たちの世代の韓国の研究者にとって、植民地の問題は避けることのできないある種の研究対象になっていますが、それをどうやって「信じる」という動詞と文章の中で結合させればいいのかということ、やや抽象的な話ですけれども、私たちの世代に先生が提示なさった一つの課題ではないか、という思いになりました。

西川：その部分を書く時、ずいぶんためらいもしたんですが、一方では、「よし！ 書き終わった！」という、「これで終わりだ」という気持ちがありました（笑）。少し付け加えたいんですけども、さっきおっしゃった竹内好の戦争体験の追体験ということは、今日の日本では非常に難しくなりました。韓国は依然として「休戦中」なので、たぶん違うでしょうが。それでも、植民地体験というものは、今の私たち自身につながっています。内部植民地がたくさん造られ、その中で生きる人たちもいれば、そこから利益を得る人もいますが、それは原理的・普遍的に存在するものだし、私たちの日常生活の経験の中にも目に見えないものとして実在しているんです。もしかしたら、今度の3・11がそのことを少し自覚させたかもしれません。もちろん、核の問題などを他人事のように考える傾向もあるし、記憶の抹殺というメカニズムが働いていてもいすけれども……そのせいか、植民地の問題に取り組む人たちも、なぜかその部分についてはちゃんと考えていないように思えます。

キム・ハン：自分の問題として取り組まない、ということでしょうか。

西川：はい、そうです。

キム・ウォン：最後に、一つお聞きしたいことがあります。この本をお書きになって近代歴史学を批判なさったのですが、ところどころで主語が「私」で始まっています。韓国でも、歴史学や社会科学において近代歴史学批判あるいは近代歴史叙述批判に関する様々な問題提起はあるんですが、実際に先生がこの本をお書きになったように、もし「私」を中心にして歴史を叙述するとしたら、主観的であるとか、客観的でないとか、こういうものを学問的な研究と見なすことができるのか、といった批判がしばしば起ります。たとえば私の場合、大体人々の口述をもって研究をするのですが、口述を聞いて研究することは、研究者と口述者の相互交渉やコミュニケーションに基づいて研究者がナラティブを「解釈」するものだという問題がいつもひっかかります。この本は、ある面では、先生が先生の過去を現在に呼び出して、先生のアイデンティティ、つまり植民地の問題、国家の問題など、アイデンティティに関わることを引き出す仕事に関わるものだと思います。私はこの本を、近代の歴史を乗り越える書き方の興味深

い試みだと判断していますが、近代歴史学批判のための歴史叙述というものが、果たしてどのような方法論や知識人としての視角を持ち、どのような方向へ進んでいくべきなのか、ということについてお伺いしたいです。この本はもちろん68年体験そのものを現在化する面もありますが、長く思想史を研究してこられた先生の冒険的な試みでもあるという点から、この問題についてお話しいただけるとありがたいです。

西川：この本の記述の仕方は、たぶん繰り返すのは難しいでしょう。つまり、「私」というのは、みんな違うということから成立するからです。あちこちから集まった人たちみんなにそれぞれの5月がある、そういう書き方です。ただ、歴史記述として成立するかどうかということについては、私がこうして本を書いて出ているから（笑）。他の人たちがこういう本を繰り返し書いたら、そういう書き方が学問の伝統の中に参入することはありえるか、と質問されるかもしれませんが。だから私は初めに、これを一つの「作品」だと言ったんです。この本が出版された後、書評は特に書かれないだろうと思っていましたが、この本に対する反応として面白かったのは、本を読んだ人たちから手紙がたくさん来たことです。もちろん私があちこちに本を送ったからでもありますけど。とにかく、さっきキム・ハン先生がおっしゃったように、彼らが自分の物語と重ね合わせてこの本を読んだということです。かなり長い手紙が何通も来たのですが、それらの手紙を通して、人々がこの本を自分の物語と考えながら読んでくれたということを知ることができました。それから、歴史家たち、特に日本史研究者の中に、これは歴史記述への挑戦であり新しい歴史記述だ、だから自分がこれから歴史記述をする時にこの本を参照しなければならない、という内容の手紙を送ってきた人もかなり多くいました。日本史研究者の中にです。ところが、フランス研究者の中にはそういう反応はまったくありませんでした。それは、外国史の研究者は自立していないからです。つまり、外国の学問をそのまま受け入れる傾向がある、ということです。ですから、68年はフランス史を書く人にとってはきわめて重要なことなのに、それについての論文はほとんど出てこないし、教科書のような分厚い本でも、68年はすっぱり抜け落ちています。歴史の最も重要な転換点を抜かしているんです。それでも何でもないようにしていますが……ヨーロッパ史やフランス史を研究する人たちがこんなに鈍感なのに対して、日本史をする人たちはしばしば私と論争になったりしながら、とても敏感に反応します。そのことが興味深かったです。

私は以前からテーゼを提示しているのですが、歴史学というものは国民国家の時代の学問であり、国民時代が、国家が利用してきた学問であるということ、したがって必ず変わるだろうし、変わらなければならないものです。ところが、そういうテーゼを提示した論文は、歴史家たちはなるべく読まないようにしているようです。

キム・ハン、キム・ウォン：なるほど。わかりました。それでは、座談会はこのへんで終わりにしたいと思います。長い時間、ありがとうございました。

西川：ありがとうございました。

テープ起こし，整理：リ・キョンスク

翻訳：チャ・スンギ，チョン・ジョンヒョン，チョ・ウネ

※付記：座談会の原稿の校正を果たされた後，末期癌のため闘病中でいらっしやった西川長夫先生の訃報が届いた。闘病中にもかかわらず原稿を校正してくださった先生の研究者としての誠実な姿勢に，襟元を正す思いである。謹んで故人の御冥福をお祈り申し上げます。

注

- 1) この座談会記事は，韓国文学の学会である「尚虚学会」の学会誌『상허학보』39集（2013年）に掲載された韓国語原文を，許可を得て日本語に翻訳したものである。なお，日本語に翻訳するに当たって，西川長夫氏がすでに他界しているため，本誌紀要編集部判断で一部を編集したことを付記しておく。
- 2) 西川長夫「談論：私の生涯と学問，そして朝鮮——遅れてきた青年の晩年について」『사이間 SAI』12号（2012年）参照。なお，この講演録の日本語訳文は，「私にとっての朝鮮——遅れてきた青年の晩年について」『植民地主義の時代を生きて』（平凡社，2013年）参照。